2024年度

【一般選抜（手続期間長期型）】
【一般選抜前期A日程／共通テストプラス方式】

3　限　目

注　意

1．試験開始の合図があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。

2．不正行為を行った場合は，本学の選抜日程全ての成績を無効とします。

3．問題冊子は１部，解答用紙は１枚です。

4．出題科目，ページおよび選択方法は，下表のとおりです。

出題科目	ページ	選択方法
物理基礎・物理	1 ～ 8	解答科目は，選択できる科目を受験票で確認のうえ，選択しなさい。
化学基礎・化学	9 ～ 16	
生物基礎・生物	17 ～ 24	
国　　語	国語１～国語19（うしろから始まります）	

5．解答は全てマークセンス方式です。マークは黒鉛筆（シャープペンシル可）で右の例のように正しくマークしてください。

マーク例 ●

6．解答用紙には次の記入欄があります。

（１）受験番号欄

①手続期間長期型または前期Ａ日程のいずれかを受験している場合
解答用紙の受験番号欄に受験票に記載されている受験番号を算用数字で記入し，さらにその下のマーク欄にマークしてください。
（一般選抜前期（共通テストプラス方式）の受験番号は記入しないこと）

②手続期間長期型と前期Ａ日程を併願受験している場合
解答用紙の受験番号欄に前期Ａ日程の受験番号を算用数字で記入し，さらにその下のマーク欄にマークしてください。
（一般選抜前期（共通テストプラス方式）の受験番号は記入しないこと）

（２）解答科目選択欄
解答する科目を１つだけ〇で囲み，さらにその下のマーク欄にマークしてください。

※受験番号および解答した科目が正しくマークされていない場合は，採点できないことがあります。

7．記入したマークを訂正する場合は，プラスチック製消しゴムで完全に消し，改めてマークしてください（消しくずを残さないこと）。

8．解答用紙は折り曲げたり，汚したりしてはいけません。

9．解答用紙の※印欄はマークしてはいけません。

10．問題冊子と解答用紙にページの落丁･乱丁および印刷の不鮮明な箇所や汚れなどがある場合は，手を挙げて監督者に知らせてください。

11．試験終了後，問題冊子は持ち帰ってください。

国　語

（解答番号 (1) ～ (60) ）

Ⅰ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（六〇点）

斎藤茂吉という歌人はご存知ですか。その息子が北杜夫です。北は、小説家を目指していて文学志望だったのですが、もっとも影響を受けたのは、父親で歌人の斎藤茂吉でした。

北が文学を志すまでは、父親は「ひたすら怕く煙たい存在[1]」だったのですが、「出し抜けに[2]尊敬する別個の歌人に変貌した」といっています（『青年茂吉』）。

彼は父親の短歌を真似て、自分で短歌を作り始めましたが一方で、父親に射す[3]老いの影を見逃しませんでした。

北は父親が散歩をする時にいつも持ち歩いていた手帳をこっそり盗み読んでいました。北はそこに書いてある短歌を読んで、まだ旺盛な創作欲があることがわかれば安堵し、逆に拙い歌を見つけると父親の衰えに失望しました。

このように、親が老いていくのを目の当たりにすると、老いることについて否定的なイメージを抱くことになるのです。

では、自分自身が老いていくと何が起こるかというと、まず身体が衰えていきます。小さな活字が読めなくなったり、歯が弱って、抜けたりしてしまいます。また、耳が聞こえにくくなる。女性の老いについて、アドラーは、若さと美にしか自分の価値を認めてこなかった女性は、コウネンキ[A]になると「人目を引く仕方で苦しみ、またしばしば自分に不正がなされたかのように、敵意のこもった防衛態度をとって不機嫌になり、さらにはこの不機嫌からうつ病になることもある」といっています（『生きる意味を求めて』）。ただ苦しむのではなく、「人目を引く仕方で」苦しむのです。

仕事から帰宅すると、妻が必ず鏡を見ながら「私きれい？」と寝るまでずっと言い続けるので困っているという男性を知っています。彼女は「人目を引く仕方で」苦しんでいたのです。

もちろん、衰えるのは身体だけではありません。物覚えが悪くなったと訴える人は多いです。顔は思い浮かぶのに名前が出てこない。私は、ダイニングからショサイ[B]に何か本を取りに行ったはずなのに、何を取りに行ったのか忘れてしまうことがよくあります。[4]こんなことが度重なっていくと老いを実感し

ないわけにはいきません。

[A]、若い時のような記憶力がなくなったというのは本当ではないかもしれません。若い時と同じように真剣に学べば、若い時と変わらず身につくはずなのです。それなのに努力もしないで、記憶力が衰えたといっているのです。

老いることや病気になることが、身体的なこと、あるいは精神的な機能の劣化や退化だけなら、大きな問題ではありません。もっとも大きな問題は何かというと、老いや病気のために自分の価値が低下したと思うことです。

アドラーは、身体が弱かったり、歳(とし)を重ねるに伴って物忘れがひどくなり、さらにそのことで生活に支障をきたすようになると、自分を過小評価するようになり、「劣等感」を持つようになるといいます。

劣等感には健全なものとそうでないものがあります。アドラーは、劣等感は [I] ものだといっています。つまり、誰にでもある、劣等感を持たない人はいないということです。

立ち上がれない、歩けない子どもが立ち上がりたい、歩きたいと思って一生懸命努力をする。自分が歩けない状態であると自分が劣っていると感じます。しかし、そういう子どもが立ち上がろう、起き上がろうとして努力しようと思わせる劣等感は健全です。

一方で、他の人と競争すると、もはや健全な劣等感ではありません。親は、自分の子どもよりも遅く生まれた子どもが立ち上がって歩き始めているのを見ると、自分の子どもが他の子どもよりも劣っていると感じるかもしれません。[B]、子どもに一日でも早く歩かせようと [II] をかけます。子どもがもしも他者との関係の中で自分が劣っていると感じ、他者に勝とうとするようなことがあれば、それは健全な劣等感とはいえないでしょう。

劣等感と対になって使われる言葉が「優越性の追求」です。優れていようと努めること。アドラーは、劣等感とセットにして、この言葉を使っています。こちらも健全な優越性の追求と、そうでない優越性の追求があります。人間が無力の状態からそうでない状態に移行する。生まれた時は不 [あ] の援助がなかったら、子どもは片時も生きていけません。そういう状態から脱しようと思うような優越性の追求は健全なものだといっていいでしょう。

またアドラーは、優越性の追求が、何かをしようと思うことの動機づけになるといっています。「すべての人の動機づけ、われわれがわれわれの文化へなすあらゆる貢献の [III] は、優越性の追求である」という言い方をしています（『人生の意味の心理学』）。ですから、今よりは住みやすい社会にしようと考えた天才たちが、いろんなものを発明したり、いろんな学問を発展させてきました。そういう優越性の追求というものがあります。

問題は、今のような説明に続いてアドラーが、「人間の生活の全体は、この活動のセン[C]に沿って、即(すなわ)ち、下から上へ、マイナスからプラスへ、敗北から勝利へと進行する」といっていることです。さらに、[5]「生きることは進化することである」ともいっています。

子どもが歩けない状態から立ち上がり、歩いていく努力をするというのは「下から上へ、マイナスからプラスへ」というイメージに［Ⅳ］しているかもしれません。

しかし、「敗北から勝利へと進行する」というのはどうでしょう。子どもが立ち上がれない状態は、敗北なのでしょうか。立ち上がったら、勝利を収めることになるのでしょうか。これは間違いだと私は思います。

［C］問題は、老いや病気になっていろいろなことができなくなることは、マイナスであり敗北であるのかということです。そうではないでしょう。

あるいは、こういう上昇をイメージする言葉を使っていると、老いに限らず、若い人でも病気になって突然いろいろなことができなくなることが、下やマイナスということになりますが、それも違うと私は思います。

アドラーの優越性の追求という考えには、いくつか問題があります。治療すれば治る病気もありますが、回復の見込みがない病気もあります。そのような病気になった時、治療やリハビリがまったく無意味なのかどうかは検討しないといけません。

このようなアドラーの考え方に対しては、当然批判といいますか、訂正する試みが必要です。アドラーはウィーンで活動していた人ですが、後にニューヨークに活動のキョテン[D]を移します。そのアドラーのウィーンでの仕事を引き継いだリディア・ジッハーが、今いったような問題点をきちんと指摘しています。

「優越性の追求」という言葉を使うと、必ず上下がイメージされます。それは喩(たと)えてみれば、梯子(はしご)に昇る人が、どんどん上に向かって昇るイメージです。上に昇るためには、上にいる人を引き摺(ず)り下ろさないといけない。それが今の［Ⅴ］です。誰もいないのであればいいのですが、上には人がいます。先に見たように、アドラーは「人生は進化である」といっていますが、ジッハーはこの進化は上に向かっての動きではなく、前に向かっての動きであり、ここに優劣はないと考えています。

上下ではなくて、ある人は後ろを、ある人は前を歩いている。平面で見れば優劣はなく、前のほうを歩いている人がいるか後ろのほうを歩いている人がいるか、それだけの違いである。速く歩ける人がいる一方で、ゆっくりしか歩けない人もいる。ただそれは違いではあっても優劣ではない、とジッハーは考えました。

このイメージはどうでしょうか。前を歩いている人と後ろを歩いている人。これでも、私はまだ優劣のイメージを拭い去[6]ることはできません。やはり前に速く歩いている人のほうが優れていると、どうしても思ってしまいます。

では、どうしたらいいのでしょうか。「進化」と考えるから問題になるのです。「進化」といったら、病気や老いは「退化」でしかありません。ジッハーのイメージでいっても、後退するということになってしまいます。

以上の問題点を踏まえて、どのように病気や老いを捉えればいいのか。「進化」や「退化」ではなく、「変化」と捉えてはどうか。若さと老い、健康と病気に優劣を認めなければいい。その時々の状態にいると考えるだけで、優劣を考えなければいいのです。そうすれば、老いや病気のためにいろいろなことが思うようにできなくなっても、そのことを自分のあるがままとして受け入れることができると私は考えています。

この話の流れでいうと、理想を自分の中から追い出すことも重要です。かつてこんなこともあんなこともできたという理想の自分から［　Ⅵ　］現実を見るのをやめてみるのです。

ハンセン病の患者さんで、北條民雄という作家がいました。今ではハンセン病は治る病気ですが、昔は治癒が困難で、それと共に、罹（かか）った人は非常に差別され、療養所も隔離されていました。そこでずっと療養を続けていた方です。

その北條に『いのちの初夜』という短編小説集があるのですが、その中の「眼帯記」に「生への愛情」だけを見てきて、「生命そのものの絶対的なありがたさを知った」と書いてあります。

病気になって初めて健康のありがたさがわかるといわれますが、それは、健康を再び取り戻せることが［　い　］提です。当時、ハンセン病は治癒しない病気とされていたことに注目してください。北條はここで、回復の可能性とは関係なく、生命そのものの絶対的なありがたさを語っているのです。

私たちに求められているのは、病気であろうとなかろうと、生きていることがありがたいと思えることです。老いも同じです。老いは［　Ⅶ　］もので、この先若くなることはありません。しかし、回復しなければ、若くなれなければ絶望するしかないのかといえば、そうではないはずです。

［　D　］、健康であることがいけないわけではありません。健康を目指せるのであれば、それはもちろん求めていいと思います。ただ何のために健康であることを求めるかを考えないといけません。[7]健康とは何か。それは、いわば「道具」です。その道具がよりよい状態であるほうが、そうでないよりも望ましいかもしれない。ただどうして健康であることを願っているのか、ということもきちんと考えないといけないと思うのです。

二〇一九年、台北で高齢者問題について講演をしました。トウダン[E]したのは私だけではなく、もう一人おられました。その方は元大学教授で、高齢者問題の専門家でした。その先生は、健康であるように努めなければならないと力説されました。これは間違っているわけではありません。しかし、健康であるように努めなければいけないのは、医療資源に限りがあるからだといわれたことには同意できませんでした。

［　E　］、医療資源に限りはあります。でも、私たちは国家のために病気になっていけないわけではありません。どんな問題を考える時にも自分を棚上げにし、［　Ⅷ　］見てはいけないと思います。

私たちはいったい何のために健康になろうとしているのか。何を目的に健康になろうとしているのかを考えなければなりません。健康になること自体が目的ではありません。薬を飲まれている方は多いと思います。私も心筋梗塞になってから毎日薬を飲んでいます。飲まなかったら、すぐにではないでしょ

うが、また心筋梗塞を起こすかもしれない。

でも、薬を飲むために生きているわけではありません。薬を飲んで健康になるために生きているのでもありません。私たちは幸福になるために生きているのです。だから、健康になる努力が幸福につながるのでなければ、意味がないのです。

（岸見一郎『今ここを生きる勇気　老・病・死と向き合うための哲学講義』より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある）

問一　二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A　(1)

① ナイコウの世代
② 音楽をアイコウする
③ 監督をコウテツする
④ 無条件コウフク
⑤ 武力コウソウを繰り返す

B　(2)

① 精進ケッサイ
② ローンのヘンサイ
③ 自由サイリョウ
④ バザーをカイサイする
⑤ サイゲンなく続く

C　(3)

① ジセンタセンを問わない
② マラソンのセンドウ車
③ フクセンを張る
④ ミンセン議員
⑤ 新製品のセンデンをする

D　(4)

① 難民のキョジュウチ
② グンユウカッキョ
③ キョレイ廃止
④ キョマンの富を築く
⑤ 入学式をキョコウする

E　(5)

① ダンワを発表する
② ジョウダンの構え
③ ドタンバで逆転する
④ アツリョクダンタイ
⑤ シュウタンバを演じる

問二　傍線部1「煙たい」、傍線部2「出し抜けに」、傍線部3「射す」、傍線部6「拭い去る」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部1　①不可解な　②気詰まりな　③照れくさい　④気がかりな　⑤腹立たしい　(6)

傍線部2　①すぐに　②徐々に　③さし当たって　④突然に　⑤初めて　(7)

傍線部3　①近づく　②立ち塞がる　③蠢く　④潜む　⑤現れる　(8)

傍線部6　①少しずつ減らす　②一部を差し引く　③骨抜きにする　④完全に取り除く　⑤やむを得ず省く　(9)

問三　傍線部4「こんなことが度重なっていくと老いを実感しないわけにはいきません」とあるが、筆者は、自身の老いを実感するときに、どのような点に最も注意すべきだと述べているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。　(10)

① ただでさえ、親が老いていくのを目の当たりにして、老いることについて否定的なイメージを抱いているのに、なおさらその思いを深くしてしまう点。

② 若さと美にしか自分の価値を認めてこなかった女性の場合、ただ苦しむのではなく、「人目を引く仕方で」、すなわち、周囲を巻き込む形になってしまう点。

③ 劣等感には健全なものとそうでないものがあるにも関わらず、老いることで生活に支障をきたすようになると、その二つの区別ができなくなってしまう点。

④ 身体的なことや精神的な機能の劣化や退化であるならば、さほどの心配はないが、老いを実感することで、自分の価値を必要以上に低く見積もってしまう点。

⑤ 若い時と同じように真剣に学べば、若い時と変わらず身につくはずなのに、何の努力もしないで、記憶力が衰えたのは老いのせいだと責任転嫁してしまう点。

問四　空欄 A ～ E に入れるのに最も適当なことばを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄A　①というのも　②もっとも　③そうすると　④だからこそ　⑤たとえば　(11)

空欄B　①こうして　②むしろ　③でなければ　④それで　⑤ところが　(12)

空欄C　①一方　②さらに　③ならば　④したがって　⑤つまり　(13)

空欄D　①その上　②結局　③なぜならば　④たとえば　⑤もちろん　(14)

空欄E　①とすると　②ゆえに　③そのうえ　④それどころか　⑤たしかに　(15)

問五　空欄 Ⅰ ～ Ⅷ に入れるのに最も適当なことばを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄Ⅰ　①普遍的な　②堅実な　③不変の　④厳然たる　⑤無垢(むく)の　(16)

空欄Ⅱ　①ブレーキ　②拍車　③発破　④なさけ　⑤鎌　(17)

空欄Ⅲ　①余波　②均衡　③源泉　④帰趨(きすう)　⑤克服　(18)

空欄Ⅳ　①背反　②合致　③見劣り　④付随　⑤先行　(19)

空欄Ⅴ　①学歴社会　②競争社会　③縦社会　④単純社会　⑤監視社会　(20)

空欄Ⅵ　①合算して　②換算して　③検算して　④引き算して　⑤御破算にして　(21)

空欄Ⅶ　①不可欠な　②不可解な　③不可測な　④不可視な　⑤不可逆な　(22)

空欄Ⅷ　①打算的に　②衒学(げんがく)的に　③第三者的に　④消極的に　⑤強制的に　(23)

問六　空欄［あ］、［い］に入る漢字と同じ漢字が［　］に入るものを、次の各群の①～⑨の中からそれぞれ三つ選びなさい。

空欄**あ**

① ［　］体交渉権　② ［　］腸の思い　③ 花より［　］子　(24)

④ 禁［　］の木の実　⑤ 一刀両［　］　⑥ 無理算［　］して買う　(25)

⑦ 地［　］駄を踏む　⑧ 失礼の［　］、お許しください　⑨ 一［　］落つく　(26)

空欄**い**

① 小人閑居して不［　］をなす　② 旧態依［　］　③ 泰［　］自若　(27)

④ 家業が左［　］になる　⑤ 理路整［　］　⑥ 牛に引かれて［　］光寺参り　(28)

⑦ ［　］車の轍（てつ）を踏む　⑧ 『夫婦（めおと）［　］哉（ざい）』（織田作之助）　⑨ ［　］人未踏　(29)

問七　傍線部5「生きることは進化することである」とあるが、筆者は、アドラーのこの言葉について、どのような考えを述べているか。その説明として適当なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。　(30)　(31)

① 「進化」のような、上昇をイメージする言葉を使って人生を捉えると、若い人でも病気になって突然いろいろなことができなくなることを否定的に考えてしまうのでふさわしくない。

② ジッハーは、人生という道を平面的に捉えて、そこには位置や速度での違いはあるが優劣はないと考えるが、「進化」という言葉を使う以上、病気や老いは「退化」と見られてしまう。

③ 病気や老いを「退化」と捉えるのではなく「変化」と捉えれば、優劣を考えなくてもよくなり、いろいろなことができなくなった自分を、ありがままとして受け入れることができる。

④ アドラーは「人生は進化である」といっているが、この進化は上に向かっての動きではなく、前に向かっての動きであり、ここに優劣はないと考えるジッハーの指摘は首肯すべきである。

⑤ 病気や老いは「退化」ではなく、「変化」と捉えるのがふさわしく、そのことによって初めて、かつてこんなこともあんなこともできたという理想を自分の中から追い出すことができる。

問八　傍線部7「健康とは何か。それは、いわば『道具』です」とあるが、筆者はなぜ「健康」を「道具」に喩えたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 (32)

① 健康であることがいけないわけではないが、健康になること自体が目的ではなく、健康であることは、何かを実現するための手段にすぎないということを示そうとしたから。

② たとえ健康になる努力が幸福につながらなかったとしても、自分がどうして健康であることを願っているのかきちんと考えることはとても意味があるということを示そうとしたから。

③ 何のために健康になろうとしているのか、何を目的に健康になろうとしているかを考えることによって、健康になること自体が目的ではなくなるということを示そうとしたから。

④ 何のために健康であることを求めるかを考えないまま、薬を飲んで、健康であることに努めたとしても、健康になるかどうかは分からず、意味がないということを示そうとしたから。

⑤ 私たちは幸福になるために生きているのであり、その目的を達成するためには、健康であることが何よりも大事な要件になっているということを逆説的に示そうとしたから。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（四〇点）

文豪・森鷗外の末子として明治の末に生まれた類は、千駄木の邸宅で何不自由なく成長した。ところが、父の死後、生活は一変する。パリ遊学を経て帰国後、母を看取り、画家の安宅安五郎の娘・美穂と結婚するも、戦争によって財産が失われ、生活は困窮していく。次の文章は、戦後、類が、心機一転、生計を立て直そうと姉の茉莉に相談を持ちかけた場面である。

「それで姉さん、今日は折り入って相談がある」

一瞬、正坐に直ろうかと思ったが、わざとらしく見えそうで胡坐のまま頭を下げた。

「そうも改まらなくても、わかってるわよ」

いつもの頼み事だろうと心得顔[1]だが、類は「聞いて」と掌を顔の前に立てる。

「僕、本屋を開くことにした」

「本屋って、え、どういうこと？」

「姉さんたちが不賛成だろうことは承知している。僕だって不安さ。勤め人にもなれなかった僕に商いなんぞできるのだろうかと、何度も考えた。でも商いといっても、食べものを扱う水商売じゃないからね。もともと、書物に縁の深い家で生まれ育ったんだ。稼業にするなら最もふさわしいのかもしれない」

茉莉は噴水でも浴びたような顔つきで、目をしばたたかせるばかりだ。

文京区がシセキ[A]の保存に乗り出し、その手始めとして森鷗外[2]の旧居と観潮楼の焼跡に記念館を建設する計画が持ち上がったのである。発案は「鷗外記念会組織準備会」で、発起人には斎藤茂吉[3]先生や佐藤春夫先生が名を連ねている。建設資金は組織準備会が寄金を募り、敷地は於菟[*1]と類が区にジョウト[B]することになった。ただ、生まれ育った土地のすべてと縁を切ってしまう決断をしかねて、類は手許に四十坪ほどを残すことにした。

「店は千駄木の、あの敷地に建てる。むろん大きな家は無理だが、道に面しては店、奥が自宅というのが町の本屋の形態らしい」

「美穂さんは承知しているの？」

「ああ。家事をしながら店番ができるし、子供たちの世話もできるからね。僕も執筆を続けられる。本屋稼業であれば[4]」

森家はむろんのこと、安宅家にとっても眷族から商人を出すなど不名誉なことであって、誰も歓びはしない。けれど「本屋を開く」という思案が出たの

は、美穂の里からだった。さして難しくない勤めもまともにできぬ婿を見て、こうなれば家の名に［　Ⅰ　］場合ではない、このままでは一家心中しかねない、何か、素人でもできそうな商いをさせるしかなかろうと考えたようだ。里とすれば、手をこまねいて静観するわけにはいかなかったのだろう。美穂もまじえて、何度か相談を重ねたのではないかと類は推している。

「もう暮らし向きのことで、喧嘩するのも厭なんだ」

「喧嘩、したの」

「そりゃあするさ。貧しくさえなければ、しなくていい喧嘩だってある」

美穂と話し合っても、はじめは「無理だ」としか思えなかった。頭を振るつど、美穂は［　Ⅱ　］を変えた。

「働くのは無理だ、商いも無理だ。では、あなたがおっしゃる、絵と文章で世にお出になる時がいずれ来るとしましょう。その時まで、子供たちに何を食べさせろ、何を着させろとおっしゃるんですか。税金も払えない、電気もいつ止められたっておかしくないんですよ」

「わかってる。僕だって始末してるじゃないか。美術館に行く電車賃も工夫して乗っている」

「そのたび、珈琲や煙草を召し上がる」

「また、些細なことを言う」

「私だって申したくありません。でも入ってくるものがないのに、出ていくばかりなんです。もう、どこでいくら借りているのか、考えるのもうんざり」

戦だらけの指で額を摑むようにして泣く姿を目の前にして、「無理だ」と言い張る気力を失った。本屋稼業については自信の欠片もない。商いが甘くないことくらいはわかっている。

恃みは、文学だ。あるかなきかの才能が真にものになれば、［　あ　］貧の苦しさから脱け出せる。それまでの辛抱だ。

観念して、美穂に同意を告げた。

「それで」と、茉莉が［　Ⅲ　］。「私に、何をしろと」

「建築費は、住宅金融公庫というのができるらしいから、そこで借りることになると思う。でも費用すべてを貸してはくれないらしいし、あの敷地にバラックを建てて、さあ、本屋ですとやるわけにもいかないだろう。美穂が大工に見積もらせたら、結構かかるそうなんだ。それで、こうして援助をお願いに上がった。於菟兄さんには、保証人になってもらえまいかと思ってる」

己でも驚くほど、すらすらと繰り出せた。於菟はすでに台湾から引き上げ、小林町に住んで東邦大学医学部教授を務めている。ゼンシン[C]は帝国女子医学薬学専門学校で、戦後、総合大学に変わった。

「大金になりそうね。杏奴[*2]ちゃんには？」
「開店の件は報告するけど、金は頼めない」
「それがいい。心配させるだけでしょう」
「姉さん、お願いします。資金の一部を助けてくれませんか」
頭を下げると、「そんな真似、やめてちょうだい」と肩に手を置かれた。
「用意するわよ」
茉莉は「持って、いきぁがれ」と［　Ⅳ　］をつけ、役者のように首を回した。

低い洋卓がカタカタと鳴っている。
対坐する編集者がひどい貧乏揺すりで、膝で卓の裏側を小突き続けているのだ。
さして歴史はなく大きくもない社だが戦後の文学雑誌の中では新人の発掘に力を入れているとの［　い　］があるので、今年に入ってから何度か原稿を携えて訪問している。
ここは玄関ホオル脇で洋卓と肘掛椅子の対が三つほど並び、観葉植物を一つ隔てた向こうにも痩せぎすの男が坐っている。類とほぼ同じ頃に入って受付嬢に呼び出してもらっていたのでかれこれ一時間も経っているはずだが、相手は一向に現れない。まだ詩人でも小説家でもない者への応対はここがもっぱらで、やたらと待たされるのが常だ。[6]
男はしばしば奥のドアに首を伸ばし、そして膝の上に肘を置いて俯く。短髪に白髪が交じっていることに気づいて、類は顔を戻した。ズボンのポケットに手を入れたが、何の感触もない。そういえば、夜明け前に最後の一本を喫んでしまったのだった。
一編でいいから、真によい文章を書いて発表したい。その念願だけで、毎日、夜中の二時に起きて文机に向かっている。日中は本屋開業のためにすることが山とある。そのほとんどの段取りは美穂がつけ、類は背中を押されて住宅金融公庫に出かけ、取次の会社に会い、町の本屋をも訪ねて商いの事どもの教えを請うている。
六月に入って公庫から二十四万円を借りることが決定して、もう事は進んでいるのだ。しかし棟梁から上がってきた見積では資金がまだ足りない。本はとても重いものであるから棚の材料費などを無闇に落とすわけにもいかず、せっかく新築するのであるから奥の住居部分も便利に心地よくと考える。高望みをしているわけではなく、建築美や芸術性云々は端から放擲している。にもかかわらず、見積の金高は頃合いで納まってくれない。

それをいかに工面するかと考えても埒が明かず、気がつけば丘の上で拳を握り締めている。一家六人で細い綱の上を渡るような心地なのだ。[7]停車場で電車を待っていて、いきなり膝頭が震え出したこともあった。梅雨が明けたら、工事が始まる。

その昂りと不安から解放されるのが、唯一、原稿用紙に向かっている時だ。いかに眠かろうと、目覚まし時計が鳴れば蒲団をはねのけ、顔を洗ってから珈琲茶碗を持って文机の前に坐る。そして書き上げた詩や小説を抱え、出版社を回っている。［　V　］はされず原稿も読んでくれるが、そこには厚い扉がある。

鷗外の息子、小堀杏奴の弟という［　Ⅵ　］があろうと、森類自身はどうしようもなく無名の作家だ。

灰皿には編集者の吸いさしが置かれたままで、灰と化して零れていく。編集者の目の動きと原稿用紙のめくり方は大変な速さだ。頼むから、もっと大切に読んではくれまいか。類は不精髭の顎を摑み、そんな言葉を呑み込む。最後の一枚に入ったかと思えばさっと目を潜らせるようなさまで、原稿用紙を手荒に重ねた。新しい煙草を口の端に咥え、火をつけぬまま息を吐く。

「面白みが失せましたねえ。それに、うちの雑誌に載せるには長過ぎる」

「先だっては短いとおっしゃったので、方々を詳細にして膨らませたんですが」

「ああ、だからジョウチョウ[D]なんだなあ。分量がちょうど良くなったって核心から遠ざかっちゃあ、わざわざ手を入れて悪くしたも同然ですよ」

「まだ駄目ですか」

落胆を隠す気力も残っていない。

「駄目というより、小説になっていませんね。[8]いっそ題材を変えて、別のものを新しく書かれた方がいいかもしれない」

「待ってください。あなたがこの作品は見込みがあるとおっしゃったから手を入れ続けてきたんじゃありませんか。最初は長いと言われたから方々を削って、そしたら今度は描写が性急だ、こうも短くては載せにくいと言われたから改稿したんです」

「一作にこだわっているお立場ではないと思いますよ。今は果敢に書かれるしかありません」

編集者は「じゃ、失礼」と言って立ち上がり、類のかたわらを忙しなく通り過ぎる。廊下を行く靴音が響き、入れ替わりのように「やあ、お待たせしました」と大きな声がした。待っていた男に声をかけている。途端に気配が騒がしくなる。

「これ、いいですよ」

「本当ですか」と、男は椅子から跳ね上がった。類はのろのろと卓の上の原稿用紙をまとめる。

「嘘なんぞ言うものですか。いや、よくここまでお書きになった。これはいけますよ」

「これまでご指導いただいたおかげです」

ちらりと目を這わせれば、礼を言う男の顔には血色が広がっていた。いかにも寝食の足りていない様子であったのに、生気を取り戻している。

「秋の号には載せたいと思うので、少し手直ししましょうか。まず冒頭の三枚はヨケイ[E]だと思うんですよ。それから、ここも要らないなあ。印象が分散するんですよ、こういう独白は。登場人物ももう少し整理しないと」

「書き留めます。すみませんが、もう一度お願いします」

男は手帳を取り出し、鉛筆の先を舐めた。「はい」「はい」と神妙な返事[9]をして、けれど声が細くなっていく。編集者の言う通りに直したら、ズタズタの小刻み死体だ。類は鞄の中に原稿用紙をしまい、立ち上がった。

「題も変えるんですか」

「いや、僕はこれでいいと思うんだけど、編集長の意向でね。どうしても気に入らないみたい。でも安心してください。僕も一緒に考えますよ」

そうやって厚い扉の前で小突き回されて、挙句の果てには「悪くなった」と言われて原稿を返されるのだ[10]。返してくれるのはまだいい方で、類に「載せる」と約束しながらそのままになっている原稿も方々にある。問い合わせるために社を訪ねれば三度に二度は留守で、やっと会えたと思ったら「上の者の意見が入ったので」という結論だ。つまり編集長のせいにして追い払う。

外へ出ると、竹棒の先にペン先を取りつけた男が煙草の吸殻を突き刺しては拾っている。背後から「号外、号外」と叫び声が聞こえて、類の躰すれすれに走り去る。手には何も持っていない。ただ叫んで、東京を走り回っているのだろう。

類も何か叫んでやろうと思ったが、空き腹で声も出ない。極貧の躰から捻り出せるものは、言葉のみだというのに。

（朝井まかて『類』より。ただし出題の都合上、表現を一部改めた箇所がある）

注1　於菟…鷗外の長男。　2　杏奴…鷗外の次女。すでに文筆家として認められていた。長女が茉莉。

問一　二重傍線部A～Eのカタカナを漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字をふくむものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

A　(33)

① 『ゲンジ物語』
② ショシカンテツ
③ ネンシ回り
④ ガクシ保険
⑤ 皇国シカン

B　(34)

① マンジョウイッチ
② ソクシンジョウブツ
③ ごコウジョウ感謝します
④ ケンジョウの美徳
⑤ ビンジョウ値上げ

C　(35)

① ニッシンゲッポ
② テンシン爛漫（らんまん）
③ オンシンフツウ
④ イッシンジョウの都合
⑤ 国語シンギカイ

D　(36)

① 交渉がフチョウに終わる
② イッチョウイッタン
③ 隠忍ジチョウする
④ お説をハイチョウする
⑤ 世のフウチョウに従う

E　(37)

① ヒャッケイをめぐらす
② 民主主義のケイガイカ
③ ゴケイ条約
④ 「ゼッケイかな、ゼッケイかな」
⑤ ラッケイ法要

問二　傍線部1「心得顔」、傍線部5「始末してる」、傍線部6「ここがもっぱらで」、傍線部8「いっそ」、傍線部9「神妙な」の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

傍線部1　(38)

① いかにも分かっているといった顔つき
② 考え込んでいるような顔つき
③ 穏やかで優しい顔つき
④ 失敗はないはずだと言わんばかりの顔つき
⑤ 知っているのにまるで知らないかのような顔つき

傍線部5　(39)

① 食い扶持（ぶち）をもらっている
② 現金払いにしている
③ 印税を得ている
④ 倹約している
⑤ 自腹を切っている

傍線部6　①ここが我慢のしどころで　②ここがもっとも肝心で　③ひたすらここで行われ　④ここまで通されることは稀で　⑤どこでもこと大差ない扱いで　(40)

傍線部8　①直ちに　②何かしら　③思い切って　④決まり悪くても　⑤なおさら　(41)

傍線部9　①不思議な　②上品な　③けなげな　④無邪気な　⑤控え目な　(42)

問三　傍線部2「森鷗外」、または、傍線部3「斎藤茂吉」の作品を、次の①～⑨の中から三つ選びなさい　(43)　(44)　(45)

①『みだれ髪』　②『夜明け前』　③『草枕』　④『たけくらべ』　⑤『小説神髄』
⑥『赤光』　⑦『山椒大夫』　⑧『それから』　⑨『高瀬舟』

問四　傍線部4「本屋稼業であれば」とあるが、この言葉に込められた類の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。　(46)

① 生まれ育った土地の一部に本屋を建てることが決まったことは、父や森家にとっても面目を施すことであり、手狭な土地を有効に活用できた自分のこの決断を、姉たちに是非とも承認してほしい。

② 自宅を併設した本屋であれば、妻も家事をしながら店番もでき、子供たちの世話もできるので、自分も執筆する時間を確保でき、本屋が不名誉な仕事であるなどとは言ってはいられない。

③ 自分に本屋という仕事が務まるかどうかは分からないが、森家と縁のある書物に関わる商いであれば、家族のために収入を得る仕事としては悪くはなく、文学の道で暮らしていけるまで堪えて働こう。

④ 経済的に困窮して、このままでは一家心中しかねず、素人でもできそうな商いとしては本屋ぐらいしかあるまいという、妻の里の意向は分からなくもないが、そこまで自分の能力を疑われる筋合いはなかろう。

⑤ 姉たちの賛同を得ることが難しいことは承知していたが、森鷗外の子どもとして生まれ、育ってきた自分にとって何よりふさわしい天職を、図らずも見つけることができて、ただただ嬉しい。

問五　空欄［Ⅰ］～［Ⅵ］に入れるのに最も適当なことばを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

空欄Ⅰ　①揉まれている　②気圧されている　③拘泥している　④奮い立っている　⑤耽溺している　(47)

空欄Ⅱ　①視点　②顔色　③宗旨　④目先　⑤話題　(48)

空欄Ⅲ　①機先を制した　②下駄を預けた　③安請け合いをした　④秋波を送った　⑤先を促した　(49)

空欄Ⅳ　①当たり　②尾鰭　③けじめ　④節　⑤注文　(50)

空欄Ⅴ　①人払い　②仲間外れ　③お払い箱　④引き抜き　⑤門前払い　(51)

空欄Ⅵ　①大黒柱　②張り子の虎　③空手形　④烙印　⑤金看板　(52)

問六　空欄［あ］、［い］に入る漢字と同じ漢字が［　］に入るものを、次の各群の①～⑨の中からそれぞれ三つ選びなさい。

空欄あ　①隣の芝生は［　］い　②［　］河夜船　③［　］紙委任状　(53)

④株価は［　］天井だ　⑤紺屋の［　］袴　⑥［　］裸々な告白　(54)

⑦［　］田買いが横行する　⑧［　］子の手をひねる　⑨［　］字国債　(55)

空欄い　①就職［　］河期　②敵の意［　］を突く　③成田空港は日本の［　］玄関である　(56)

④薄［　］を踏む　⑤小田原［　］定　⑥風［　］被害　(57)

⑦当選確実の下馬［　］が高い　⑧［　］敬訪問　⑨［　］炭相容れず　(58)

問七　傍線部7「停車場で電車を待っていて、いきなり膝頭が震え出したこともあった」とあるが、類はなぜそのように追い込まれたか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。　(59)

① 毎日、夜中の二時になると、一編でいいから、真によい文章を書いて発表したい願望が頭をもたげ、一心不乱に筆をとることができるのに、日中は、本屋開業のためにすることが山とあり、執筆に集中することはできないから。

② 住宅金融公庫から二十四万円を借りることも決定しているのに、棟梁から上がってきた建築費の見積では資金がどうしても不足し、そうかといって不足分を補うあてもなく、二進(にっち)も三進(さっち)も行かなくなってしまったから。

③ 梅雨が明けたら、工事が始まるというのに、住宅金融公庫からの融資では建築費をまかなうことができなくなり、建築美や芸術性云々などと言ってられないような、切羽詰まった状況に立ち至ってしまったから。

④ 今年に入ってから何度か原稿を携えて出版社を訪問すると、まだ詩人でも小説家でもない自分を、編集者はそれなりに扱ってくれるが、それは、編集者が自分の才能を買ってくれているためではないことが分かっていたから。

⑤ 本屋開業のための段取りのほとんどは妻がつけ、自分にできることと言ったら、住宅金融公庫に出かけ、取次の会社に会い、町の本屋から商いの事どもの教えを請うことぐらいであるという事実に日々苛(さいな)まれてきたから。

問八　傍線部10「そうやって厚い扉の前で小突き回されて、挙句の果てには『悪くなった』と言われて原稿を返されるのだ」とあるが、このときの類の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。　(60)

① 自分に対する編集者の態度は、ずいぶんとぞんざいで、礼を失したものであった。一方、近くで待っていた男に対しては、丁寧で、微に入り細をうがった的確なアドバイスをしており、その応対の違いには驚くばかりである。

② 極貧の躰から捻り出せるものは、言葉だけである。文学者として名をなそうと決意した以上、編集者から受けた精神的苦痛は、言葉にして広く訴えるべきだか、それすらできないのは一体なぜなのだろう。

③ 近くで待っていた男は、編集者の言葉を真に受けて、ご丁寧にも手帳を取り出して書き留めている。ただし、編集者の言うとおりに直しただけでは、作品はよいものにはならないということに、早く気づかなくては彼もこの先がない。

④ 自分の原稿に目を通してくれるのはありがたいが、編集者の目の動きと原稿用紙のめくり方は大変な速さで、もっと大切に読んではくれまいかと思っても口に出せなかったことが、今となっては唯一の心残りである。

⑤ 手厚いようでいて、実は、編集者に適当にあしらわれている男の姿は、まるでこれまでの自分のようだ。自分の才能の有無はともかく、まともに向き合ってももらえない今の状況は、あまりに理不尽ではないか。

ご注意

1. 本書の一部あるいは全部について，発行者の許可を得ずに，無断で複写・転写することは禁じられています。

2. 本書の内容に誤り・誤字脱字などございましたら，ご連絡いただけると幸いです。

2024/6/1

発行・制作:広島国際大学入試センター

連絡先:739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36

TEL: 0823-70-4500　FAX: 0823-70-4518

Mail: HIU.Nyushi@josho.ac.jp

URL: https://www.hirokoku-u.ac.jp/

Copyright © 2024 Hiroshima International University, All rights reserved.